

『小説・修復腎移植』



著者・青山淳平

挿絵・山本良秋

発行所・本の泉社

対立

あわただしく年が明け、二〇〇七年になった。

一月九日の朝、水野は妻をつれて空路、内藤が紹介してくれた東京のクリニクへゆくことになった。ホテルはとらず、一日で往復するつもりである。

静岡の上空で、富士山が見えます、と機内アナウンスがあった。

窓際のシートがひとつ空いていたことは幸いだった。富士山をみたいというので、見えない側のシートから、水野は久美子を反対側の窓際へつれていった。

「正ちゃん、きれいよ、きれい！」

久美子は周囲の乗客におかまいなく大きな声をあげ、富士山が雲間にかくれるまで見入っていた。診察が目的とは告げてなかった。新年からはじまった大河ドラマ「風林火山」の制作スタジオを見に行こうと誘いだし、気乗りしないのをなだめながら飛行機にのせたのである。万一雑踏ではぐれたとき、携帯で連絡をとりあうことにしていた。それでも迷子になった場合も考え、名前と住所、それに水野の携帯番号を記した紙片を三枚用意し、妻の上着とズボンとハンドバッグのなかにいれてある。

渋谷でバスをおり、久美子の手をひきながら舗道を歩いた。

白い外壁の大きなビルの五階に内藤から紹介されたクリニクがあった。

待合室は患者と付き添人でいっぱいである。水野が久美子の座る場所を目でさがしていると、おくの壁際にいた年配の婦人が立ち上がり、手まねきした。側には息子らしい青年が表情を変えずに座っている。厚意に甘え、久美子を空いた席にすわらせ、水野は婦人とともに受付横の廊下に立って、順番がくるのを待つことにした。診察は午前の最後にとつてもらっていた。受付で手続きをすると、水野にだけ尋ねたいことがあるので臨床心理士と面談するように、といわれた。面談はすぐ終わる、と受付はいう。久美子の様子を見ると、青年のよこにおとなく座っていた。

婦人に一言ことわると、廊下から心理士のへやに入って、水野は面談をうけた。渡された質問用紙に回答すると、妻と結婚してからの出来事をいろいろ尋ねられた。腎移植のことで話がすこし長くなった。面談をすまして廊下へでると、婦人がいなかった。待合室の壁際に視線をむけた。青年も久美子もいなかった。受付でたしかめ、青年の診察がはじまったことがわかった。青年についていったようだ。診察室へ押し入ると、青年と婦人が医師から断層撮影の説明をうけていた。もちろん久美子はいない。待合室へひきかえし、それからトイレをのぞいたが、久美子はいなかった。水野の顔から血の気がひいた。

携帯に何度電話をしても、つながらなかった。

ビルの外へ走りでて、ためらうことなく、来た道を引き返した。駅に近づくにつれ、人通りが多くなった。気配を察し、すれちがう通行人が道をあけてくれる。

東急百貨店が見通せるところまで来て、ひよつとして久美子はクリニックへもどった気がした。踵きびすをかえし、いそいでクリニックへもどってみた。待合室にもトイレにも、もちろん診察室にも久美子はいなかった。受付で事情を話し、妻がもどってきたら携帯へ報せるように頼むと、ふたたび往来へでて、久美子のすがたを探して歩いた。ぐるぐる道玄坂周辺をめぐり、久美子の携帯へも電話を試してみたが、応答はなかった。

昼過ぎまで、渋谷駅のハチ公前広場に立ち、久美子をさがした。それから駅前
の交番へいくと、妻の行方がわからなくなったことを告げた。上京した理由をいろいろ話していると、「それ、奥さん、ひとりでNHKへ行った、かもねえ」と警官が推測した。いわれてみればそのとおりだった。交番をとびだし、タクシーで神南の放送センターへ急いだ。久美子を見つけたのは見学者コースの入り口のベンチだった。

「どうしたん？ 遅かったね、正ちゃん」

久美子は不思議そうな顔をした。

どうやって来たのかたしかめると、タクシーをつかまえて、「功名が辻」と行き先を告げたのだという。昨年の大河ドラマだったが、運転手が気を利かして運んでくれたようなのだ。タクシーのなかで携帯が鳴ったが、あつかい方がよくわからず、電源を切ってしまった。

結局、受診させることはできず、水野は妻と松山へもどってきた。

この日、ふたりが帰路についたころのことである。

「江戸銀」のくだんの奥座敷で、内密の新年会がはじまろうとしていた。

世話役は移植学会の元幹部である。元幹部のよこにつくように業界紙の社主がすわり、対面の上座に厚労省OBの松岡亮三、その下座に特別指導監察官の田原克己がひかえていた。この四人はちょうど二か月前の十一月初旬と同じ顔ぶれだが、ここにもうひとり、移植学会理事長の中田孝造が加わっていた。

あいさつを交わし合うと、すぐに実務的な話にうつった。

「田原君、ひとつ簡潔にたのむよ」

と松岡がうながした。田原はかしまったまま、ていねいだが自信にみちた言葉づかいで、宇和島の状況を説明した。

年末の二十六日と二十七日、特定共同指導の対象に指定した市立病院にたいして、厚労省を中心としたチームは、恵州会病院で実施したのと同様の立ち入り調査をした。市立病院も、適切な診療行為と適正な診療報酬手続きをさだめた省令に違反している疑いが強まったからである。主眼はもちろん、丸山医師が市立病院でおこなった病腎移植手術である。病腎の移植は「健康な腎臓を移植することを前提としている診療報酬制度」から逸脱しているおそれがあった。さらに省

令の規則では、保険診療での実驗的な医療行為は原則禁止されており、病腎移植
それ自体が規則に違反する疑惑も浮上していた。なによりも移植につかった病
腎が「健康な腎臓」ではない、ということになれば、病腎移植は保険適用外と判
断され、社会保険事務局は市立病院にたいして診療報酬の返還をもとめること
になる。さらに病腎移植手術にかかわる医師と病院側の行為がきわめて悪質で
あれば、厚生省は監査にのりだし、丸山医師から保険医の資格をはく奪し、かつ
市立病院にたいして保険医療機関の取り消しをおこなうことになる。このこと
は同じ日に、三度目の合同調査をおこなった惠州会病院も同様である。
社主が話をもりあげるように口火をきった。

「丸山はんはまちがとるが、丸山医師を放任しとった病院にも責任はあら
いなあ。保健医療の取り消しも当然や」

松岡はのどを鳴らして酒をのみほすと、慎重に応えた。

「状況はいま田原に説明させたとおりですが、われわれ厚生省としては、独自
に判断するわけにはいかんのです」

「それ、保険医療の取り消しのことやるか」

「ええ、そうです。ポイントはふたつあります」

松岡はぐい呑みをおくと、解き明かすようにいった。

「ひとつは学会が病腎移植をどうみるかです。厚生省としては医学的な判断
をまち、それをふまえて動くことになります。もうひとつは、世間の声、世論で
す。世論にも耳をかたむけなくてはなりませんから」

「お言葉やけど松岡さん、がんやネフローゼや悪性リンパ腫の腎臓が健康な
腎臓とはいえんでつしゃろ。そないな腎臓を移植するなんて、医学的な判断もく
そもないやろ。例の旧陸軍の九三一部隊だって、そないなおぞましいことはやら
んでつしゃろ」

と社主はきめつけた。

松岡はおちついた口調で応えた。

「おつしゃるとおりですが、厚生省の段取りとしては宇和島の市立と惠州会
のふたつの病院の病腎移植を検証する専門委員会の結論をみたうえで、学会に
は国民一般に向けた声明をだしていただく。この声明はもちろん世論を大きく
動かすでしょう。声明をうけて、厚生省としては臓器移植法の運用指針の改正案
をホームページに掲載して周知するとともに、パブリックコメント（一般国民の
意見）を募集します。そして応募コメントの意見を参考にして改正案を最終的に
決定する。そのような運びになるでしょう」

じつと耳をかたむけていた元幹部はとなりの中田理事長に前菜をすすめ、中
田が烏賊を賞味するのをみとどけると、たしかめた。

「専門委員会はしかるべき結論をだす。そうでしょう理事長」

「それはそうです。高い識見をお持ちの先生方を推挙していますから」

と中田は渋い声で応えた。元幹部は松岡と田原のほうへ向かって、つぶけた。

「気がかりなのは世論と恵州会の動きです。まず世論のほうですが、宇和島のほうではなんでも、移植医療への理解を求める会というのができたそうだな。田原さん、あなたこの会のこと、当然知っているでしょうな」

田原は黒のアタッシユケースから黒革の手帳をとりだし、求める会の役員十六名の名前を読み上げ、主だった役員について説明した。

「顧問の内藤俊文先生は、二十年もの間、市立病院の院長をつとめ、地元では丸山医師の育ての親、といわれております。あと大学教授と元移植コーディネーターの二人をのぞき、他の役員はみんな移植者で、代表の向井原陽二も丸山医師の移植患者であります」

元幹部は怪訝な顔で訊いた。

「その向井原某が患者をけしかけ、求める会をつくった、ということですか」

「大筋、そのように理解しております」

「きつと恵州会にかつがれたんでしような」

「そうだと思われます。本部の野添事務総長はひんばんに宇和島入りしていません」

「野添がねえ。これは手ごわい相手だ」

「あの組織は、けんか慣れしていますから」

田原はプールにでも飛びこむような顔でいった。

元幹部はたしかめた。

「それはそうと、向井原という御仁は、何をしている人かね」

「水産会社の経営者で、イワシやアジをとっていると聞いております」

「ほう、漁師が代表か。いかにも魚臭い土地柄だね。それで役員のなかに、まさか病腎の移植者はいないだろうな」

元幹部が問いただと、すぐよこから社主がわってはいった。

「いまするな先生。水野、ほら愛媛新報の水野正良という地元の新聞記者。去年の八月、大阪で全移協の移植ゼミナールをやりましたでしょ。多島先生が講演なさったとき、会場から質問した男、あれ、水野ですがな」

いわれて、元幹部もすぐに思い出した。会場から腎臓の提供数を増やす方法はないか、と意見を求めた男がいた。

林は不快そうに水野のことを話した。

「聞いた話やが、水野はん人柄はええが、丸山医師に偏向しているところがあるようです。いわば移植至上主義者やわな。もともと求める会を立ち上げたのは水野ですがな。病腎移植が問題になるとすぐ記者会見をして、病腎の移植をうけたことを告白し、丸山医師を支援する会をつくる、と記者の前で広言したわけや」

「なるほど、すると求める会はいま、代表の漁師の背後に病腎移植者の記者がいて、さらにそのうしろに惠州会の事務総長がひかえている。こんな構図ですな」

「そのとおりですワ。水野はんのことに話しをもどしますと、記者会見から数日後、全移協も協力して欲しい、とかれから直接電話があったそうです。全移協は即座にことわったそうです。丸山はんは移植医療の信頼をそねた戦犯ですわな。なんでそんな医師を支援せにゃならんか、まるつきし道理が通らんと全移協はいつとりました」

と社主が息まいたところで、仲居の声がして襖があいた。

料理がならべられ、仲居がいなくなると元幹部がいまいました。そうにいった。

「まあ、求める会というのは、丸山教の信者集団みたいなもんですな。学会へも要望書が届いているが、相手にはしてない。ほつとります。そうでしたね、理事長」

「もちろん、学会としては交渉相手として認めておりません」

中田はきつぱりと、いいきった。

「厚労省はどうですか」

「対応は当然、学会と同じになるでしょう。求める会についても特別指導監察室が主管し、田原に情報を収集させていますから」

と松岡は応え、田原に命令するよういった。

「この際、お話しておくことがあれば、お伝えしてくれ」

田原ははしをおき、手帳に目を落とし、記述を指でなぞってから顔をあげた。

田原はまず、設立総会のあとのことを話した。

総会が終了すると、司会役の水野が強い口調でメディア関係者全員に退出をもとめ、のこった会員と家族だけで意見を交換した。家族をよそおってのこった田原は、会場からの発言をメモった。丸山医師への讃辞がつづいた。いささかうんざりしていると、とつぜん女がヒステリックに叫んだ。丸山医師は人助けをしているだけじゃない、移植がうまくいかずに、見殺しにされた患者もたくさんいるはずだ。わたしの夫は移植後、だんだん様子がおかしくなり、脳梗塞の発作で倒れ、いまは寝たきりになってしまった。それからこの方の御主人は、と彼女はすぐ横にすわっていた同年配の女性に立つよううながした。女性は立ちあがったが、ひくひく泣き声をもらすだけで言葉がでない。かわりに女がいった。女性の夫は市立に入院していたとき、丸山医師から移植をすすめられ、人の腎臓をもらってまで生きたくはない、と断ったところ、丸山医師はとたんに口をきいてくれなくなった。しかたなく他の病院へかわったが、ふさぎこみ、夫は自殺してしまった。女は、丸山は人殺しだ、とわめきちらし、となりで泣き崩れる女性をだきおこし、会場からでていった。

「丸山医師の患者も決して一枚岩ではありません」

田原は得意そうにいった。

幹部は徳利を手にして松岡に酒をつぎ、

「医師も人間ですからな、ありうる話です」

と、しんとした声で自戒するようにいった。

「ほやけど、先生」

社主がよこから元幹部に提案した。

「今年になって新聞は、移植のマイナス面をあまり書かん。いまのような話は、マスコミがしっかり取材して国民に報らせんといかんのやなかるうか。バッシングいうが、バッシングされることで、患者にとって丸山医師がますます神様になつてしまつとる。国民は判官贔負はんがんひいきやから、ほつとくと病腎移植肯定へと世論がうつる可能性だつてありまつせ。丸山医師の素顔とやった移植手術のマイナス面を、学会はもつとマスコミへ伝えんといかんと思ふんやがねえ」

「それはよく承知している。理事長とも御相談のうえでやってゆくよ」

と元幹部は中田をたて、田原に訊いた。

「市立の関係者のあいだでは、丸山医師の評判はどうですか」

「事務と看護士のなかには、反感をもつておられる方が多い。あの先生は赤ひげなんかじゃなく、奇人・変人のたぐいだという方もいらつしやる。とくに大学から派遣されていた医師はぼろくそに批判しています」

「ふむ、まあそうでしょうな」

系列の出身大学から、元幹部のもとへ極秘の情報がはいつていた。梅毒やB型肝炎の患者から摘出した腎臓を丸山は移植につかつたというのである。この驚くべき事実を、いつマスコミヘリークすればよいか、そのタイミングを元幹部はひそかにはかつていた。

「もう二点、ご報告があります」

と田原はあらたまつた。

一つは、求める会の動向だつた。

一月二十日（土曜日）に松山で講演会、そして二月十八日（日曜日）には宇和島で総決起集会在予定されていた。

元幹部は講演会と決起集会の日を二度三度たしかめ、中田のほうへ上体をよせると小声で、市立病院の専門委員会の調査結果の公表を講演会の前にぶつけることはできないか、と打診した。意を察した中田は、いそがせましよう、とうなづいた。

つぎに田原は、五月に開催されるアメリカ移植会議での発表をめざし、丸山医師が病腎移植の演題を執筆中だ、という情報をつたえた。

「それ、ほんとうにアメリカの移植会議ですか」

中田がすぐにたしかめた。手帳をみながら、アメリカの移植外科学会と移植学会が合同で開催する世界的な大会だそうです、と田原は説明した。

「それはよく承知しています。たしか丸山医師は日本のどの学会にもお入りではないはずだが、そのような立場で応募されて、演題が審査の対象になりますかねえ、おおいに疑問です」

中田はつきはなし、元幹部の意見をもとめた。

「丸山さんはこれまで日本の学会にも背をむけていた田舎の医師です。日本語のペーパー一本だつて書いたことはないはずですが」

元幹部はくびをかしげ、バカにした。

「あの医者はどこでしたかね、たしか名前を聞いてもすぐに忘れてしまう地方の新設医学部の出身でしたなあ。英語で論文となると、演題を書くのでさえ、たいへんでしょ」

それを聞いて、中田も当然だ、という顔をした。

元幹部は憶測した。

「どう考えても、丸山さんひとりの思いつきで、アメリカ移植会議へ演題をおくるなんてことはあり得ない話です。これは理事長、惠州会がけしかけたんですよ」

「なるほど、惠州会ですか。惠州会が代筆しても、アメリカの学会は相手にせんでしょ」

「私もそう思います」

元幹部が同意すると、田原がおずおずと口をはさんだ。

「あとう、そのことでしたら、フロリダ大学医学部の藤原志郎という移植外科の先生が丸山医師に論文を書くよう、すすめたそうです」

あげたレンコンへのびていた中田の箸が、とまった。

中田は天井をおおぎ、はしをそろえて膳におくといった。

「そうか、フロリダ大学の藤原志郎ですか。藤原君なら多くの研究室にいた移植外科医です。臨床医として、すこぶるいい腕をもっているからアメリカでも高く評価されていると聞いています。ぼちぼち日本に帰ってきて、後進を育ててほしい人材ですよ」

「そうですね。そのような方が推薦すれば、惠州会のひもつき論文でも無視されることはないなあ。読んではくれる。しかしまさか採用、ということにはならんでしょ」

と元幹部は眉宇をせばめ、自問自答した。

黙つて話を聞いていた松岡がいった。

「しかし先生、アメリカはなんでもありの国ですからねえ、臓器も不足していません。病腎が有効という論文なら、採用ということもあるかもしれません」

「松岡はん、それはないでっしやる。丸山はんは日本のド田舎の医者でっせ。移植先進国のアメリカが名もない医者 of 論文など相手にしまへん」

社主はすぐに否定したが、中田は心配そうにみんなをみまわした。

「普通はそうでしょうが、藤原君がっている」

「理事長、万が一でも採用ということになれば、学会の権威はまるつぶれです。アメリカのほうにもこちらの事情をよく理解していただく必要があります」

「まさかないだろうが、かりにも採用ということなら、対応を考えましょう」
中田はうかぬ顔で応えた。

学会上層部のこうした思惑など、水野は知るはずもない。

求める会の運動は、一月の講演会ではずみをつけ、二月の決起集会を成功させるための準備にはいつていた。役員はそれぞれ毎週土日の昼間に瀬戸内海グループの病院がある各都市の商店街に立ち、六万人を目標にして、厚労省などに送った要望書に賛同を求める署名活動をはじめた。

年がかわり、マスコミの論調には少し変化の兆しがでてきた。大手三社と共同、時事通信はあいかわらず学会寄りの報道をつづけていたが、都心部に読者層をかかえる新聞社のなかには、病腎を容認する記事がのるようになった。求める会のブログを立ち上げ、管理している役員がそのつどしらせてくれる。水野は運動の前途に希望をいだいた。

いっぽう愛媛新報は、新年にはいると「移植の光と影」のタイトルで特集をスタートさせていた。記事は影の部分が多く、とくにここ数日、丸山医師への批判的な報道がつづいていた。手術後に死亡した丸山の患者の遺族を取材し、遺恨を活字にしたものばかりである。つい昨日のこと、「これは、意図的なネガティブキャンペーンじゃないか」と津和田に抗議したが、「あんたこそ、上から目線になつている。納得のできん治療や手術で愛する者を亡くした家族の無念がわかんのか！」と津和田は声を荒げた。「知ったような口をきくな！」と水野はやりかえし、にらみ合いになった。

第三水曜日、水野は定期検診のため宇和島へでかけた。

丸山医師はいまだ渦中の人だったが、以前と変わらず目の前の患者がかれの生活のすべてだった。

診察がすむと、水野は訊いてみた。

「先生、演題はどうなりましたか」

「昨年末、丸さんの論文、フロリダの藤原先生のもとへ送りましたよ」という電話を内藤からもらっていた。専門用語の英訳はなかなか困難なので、仕上げは藤原先生にまかせることにした、と内藤は期待をこめた口ぶりだった。

その論文の演題の採否のことである。

カルテのうえにボールペンをころがし、丸山はひとごとのようにいう。

「まだなんもいうてきとらんけ、ダメなんじゃんろ」

「いや、先生、きつと採用されますよ」

「ほうかなあ」

「修復腎の利用はアメリカで高く評価される、と内藤先生はおっしゃっていましたが」

「とくべつなことはしとらんけどなあ」

丸山は背を丸め、視線をフロアにおとした。

「発表となれば、病腎移植が世界で認められます」

「それはええことじゃ……」

「あれ、あまり嬉しそうじゃありませんね」

丸山は顔をあげ、照れくさそうにいった。

「いやあ、そりゃ嬉しい。しゃけど発表となるとなあ、なんせアメリカは遠いけん」

演題が採用されればそれは望外の喜びなのだが、丸山は華やかな場所へ出るのがひどく苦手なのである。

それでも講演会と決起集会には、すみの方へ「座つとくだけ」という条件で、しぶしぶだが丸山は出席することになっていた。講演のほうは高見澤敬三がひきうけている。さらに日程の調整がつけばフロリダから藤原志郎が午後、松山の会場へ直接かけつけ、アメリカの移植事情を話す予定である。

野添からの情報では、高見澤はすでに年明け早々、宇和島のふたつの病院へ調査に来ていた。こんどは講演の前日に、ふたたび宇和島を訪れ、その夜、松山へひきかえして泊まる予定だという。求める会にとつて、一献差し上げたい大事な人物である。電話であいさつはしているが、気むずかしい人物のようである。

「高見澤先生にお会いになりましたか」

水野は丸山から高見澤のことを聞きだそうとした。

丸山は白衣のポケットへ右手をつっこみ、左手であごをなでた。

「あの先生、いまだき、ヘンな人じゃ」

「はあ？」

「なーんの得にもならせんけん。それでも一生懸命じゃけん、変わつとらいな」

と丸山はいった。

(それじゃあ、あなたと同じではありませんか)

水野は笑いたくなるのをじつとこらえていた。

高見澤のことは、診療所で内藤からくわしく聞くことができた。

中国新報に投稿したあと、高見澤は病腎移植者の予後を調査するため、総件数のはあくに着手した。最初に病理検査依頼書と病理診断書のコピーを手にいれ、

このふたつの書類からドナーとレシピエントの氏名、手術年月日、年齢、性、住所、血液型、予後のことなど十数項目わたる一覧表を作成した。つぎに瀬戸内海グループの医師と順次面談し、ドナーとレシピエントの現在の状況について聞き取り、各項目の空欄をうめていった。この結果、呉共済病院で六例、宇和島恵州会病院で十一例、そして市立宇和島病院では十九例、合わせて三十六例の病腎移植が行われていることが明らかになったが、市立ではまだ不明な点が多く、数かふえることが予想された。丸山医師のレシピエントには漁師や農夫が多く、医師とのつながりもふかい。生活が大変だから、と手術代を丸山が立て替えたままになっているレシピエントも数人いる。丸山が自分の患者がやっている理髪店や居酒屋へ電話をすると、そこから問い合わせが各集落へひろがり、別のドナーやレシピエントの安否がわかるといった具合に、丸山は患者とのつながりが深い。

「高見澤先生は、宇和島にはのどかで明るい里のコミュニティーが残っている、とおっしゃっていましたが、なるほど、と思いましたね」

内藤は他県の病理学者がくださった郷里の風土の診断に満足気だった。

内藤は高見澤を市立病院へ案内したおり、敷地内にたつ山根東洋城とうようじょうの句碑を

みてもらった。幕末四賢侯のひとりでもある第八代宇和島藩主伊達宗城だてむねなりの外孫にあたるこの俳人が、一族の祖先の地である奥州への望郷を詠んだ句である。宇和島は仙台藩主伊達政宗の長男秀宗を藩祖にしている。政宗は秀宗の治世をたすけるため一千五百名をこえる家臣を宇和島へおくれたから、仙台藩とのつながりは血縁としても濃く、文化も薫り高いものがある。

「病腎の調査に来られたのに、ついつい村田蔵六後の大村益次郎とイネシールポルトの娘・日本初の女医のことなど話してしまい郷土自慢みたいになりましたが、高見澤先生は私の意図をよくくみとり、熱心に聞いてくださった」

内藤は眼をほそめ、ご満悦のようすである。
案内のついでに、宗城がまねいた高野長英の住居跡を高見澤にみてもらった。開国へのさきがけとなったこの悲運非業の蘭学者が、ほぼ一年暮らしていた場所に、高見澤は強い関心をいだき、写真を何枚も撮っていた。

内藤はソファからはなれ、峰々に雪をいただく鬼ヶ城山系とむきあった。

「宇和島は辺境の地ですが、歴史に名をのこす人物がやってきて、時代のさきかげとなる仕事をしています。蔵六もイネも長英もしかりです」

「宇和島の歴史的な役割ということですね」

水野も熱い思いにかられる。

「そうです。平成のいま、病腎がそうなのです」

内藤は鬼ヶ城をながめながら、うなずいていた。

それから二日後の十八日の午後のことである。

学会寄りの専門委員会は、メディア関係者を市立病院にまねきいれ、とうとうな会見をひらいた。学会から派遣された三人の委員と、厚労省調査研究班の原高武雄班長らが合同でしらべた病腎移植の調査結果をわざわざ前倒しして発表した。二日後の求める会の講演会にたいする世論対策である。

この発表では、市立病院で丸山がおこなった病腎移植は十四例だった。このうちの六件がネフローゼ症候群の病腎である。委員たちは記者団を前にして口々に、

「ネフローゼを理由に腎臓を摘出するなど、学術的にまったく考えられないことで、とんでもないことだ。こんなことはとても治療とはいえない。さらにその病腎を移植につかうなどということは、人体をつかった実験としかいいようがない」と断言した。また、

「がんの病腎の移植が二例あったが、二例ともがんは三センチ以下と小さく、部分切除してのこすのが常識なのに摘出してしまっている。がんの腎臓の移植はレシピエントにがんを植え付けるようなもので容認できない」と丸山医師をきびしく批判した。

しかし患者の予後について質問がでると、「いずれも手術後一ヶ月ほどの診察記録しかのこっていない。また全員現在は転院しており、あとのことは追跡できない」と、応えるにとどまり、会見は尻切れのまま終わった。

記者団はただちに惠州会病院へ移動した。

おしかけた記者たちの質問に丸山医師はつぎのように応えた。

どの患者もせつばつまった状態だから、なんど説明しても、とつてくれという。移植する患者にもがんになるおそれもある、と何回も話した。それでもよいというので、がんの部分は切除し、よい状態にして移植した。さいわいこれまで、がんが再発した患者はいない。ネフローゼについても、タンパク尿がでて顔がぱんぱんにはれ、肺に水がはいった患者をほっておくわけにはいかない。摘出した病腎は、タンパク尿が出つづけたらとりだすことをレシピエントに説明して、納得してもらい移植した。ネフローゼ腎の場合も全員が元気になり、社会復帰している。

丸山は説明をおえると訴えた。

「あんたら、ワーワー騒ぐのが仕事かも知れんが、今年もすでに絶対とつてくれというので、二センチ以下の腎臓がんを摘出しとる。こんな事件がおきてしまったけん、移植につかえるのに、すててしまった。だれかが普通の生活にもどれたんや。あんたら、そのところをようにわかってから報道してくれ」

翌十九日の各紙で、この訴えの要旨をのせたのは愛媛新報だけであった。出社

した水野は、愛媛新報が丸山医師のコメントをきちんと報道しているのは、一方的にならず好感がもてる、と津和田に社内電話でつたえた。津和田は若い記者のなかにはあんたの味方もいるよ、と応えた。

この日、水野は講演会の講師の高見澤と夕食を共にすることになっていた。帰り仕度をしていると、「奥さんが来られています」と守衛から電話があった。このところ出勤の日は、久美子は実家ですごしていた。帰宅の途中、水野は実家にたちよって、妻をつれて帰っている。驚いて駐車場へおりてゆくと、久美子は守衛室にいた。

「すみません、ご迷惑をおかけします」

「いえ、大丈夫ですよ」

と事情をよく知るようになった守衛は、容態を気づかうようにいった。家にもどる、といつて実家をでると、久美子はそのまま歩いて新聞社へ来ていた。急に夫に会いたくなくなり、がまんがなくなつたのだった。外はすでに暗くなつていた。水野は妻が無事にたどりついたことに安どした。すぐ近くのホテルで、高見澤と三人で夕食をとった。

食事をしている間、久美子は緊張のあまりそわそわと落ち着かず、することも話すこともつながりがなく幼児と会食しているような状態になつたが、高見澤は終始微笑をたやさずやさしかった。高見澤はピック病の初期症状だと診断し、妻を気づかう水野に最大限の敬意をはらっていた。

帰りの車のなかで訊いた。

「高見澤先生、いい人だった、だろ？」

「うん、でもちよつと怖かったよ」

「病理学者は、医者 of 裁判官だから。これから、力になってくれる先生なんだ」

「ふーん、じゃあ、あたしも好きになる」

久美子はすなおに、自分にいきかせるようにいった。講演会の日の早朝、野添から朗報がとどいた。藤原が昨日、講演に間に合うようにフロリダを発つたという電話だった。会場の女性総合センターでは、昼すぎから役員の半分が受付をし、のこりは会場の設営、視聴覚機器の整備、それに大学教授たち数人は駐車場の係をした。会場は百五十名ほどの参加者で一階席がうまった。メディア関係者は最前列に陣取っていた。進行役は有吉だった。

午後一時、向井原が代表あいさつをしたあと高見澤が演壇にたち、開口一番、最前列の報道陣に語りかけた。

「きちんとした記録がのこっている最初の病腎移植は、九十一年一月に呉共済病院で実施されている。このときは七十五歳のドナーから腎動脈瘤で摘出された病腎が四十四歳の透析患者に移植された。レシピエントの公務員が無事に

退院した三月、新聞はこぞつて手術の成功を祝い、執刀した医師を褒めたたえている」

新聞記事がスクリーンいっぱいに映しだされた。高見澤はつぶけた。

「この最初の経験がうまくいったので、仲間の医師同士で情報を交換しあい、やがて腎がんや尿管がんで摘出した腎臓も移植につかうようになった。瀬戸内海グループは移植マニアの医師集団のように報じられたこともあったが、最初から計画的に病腎の移植をやっていたわけではない。患者のためにいろいろ試行錯誤したなかで偶然、病腎を修復すれば移植につかえることを発見した。つまり病腎移植は自然発生的にうまれてきた治療方法であって、いわば廃棄物利用にすぎず、なんら特殊特別なことではない。このことをしっかり理解したうえで報道してもらいたい」

と注文をつけたあと本題にはいり、分析したデータやグラフをスクリーンに映しながらつぎのように話した。

似たような手術がないかと、国内外の学会論文を精査した。国内は二十年前、国外は三十年前までさかのぼった。国内では大手の大学病院と公立病院を中心に腎動脈瘤などをつかった病腎移植が九十例みだったが、丸山医師のようにがんを切除したあとの病腎をつかった例はなかった。ところが国外では腎細胞がんをつかった移植が七十二例もみつかった。つぎに瀬戸内海グループのつかった病腎の生着率であるが、市立の十九例をふくめ全部で三十六例について調査した。症例数が少なく、学会発表のデータと比較してもあまり意味がないが、修復腎移植はドナーもレシピエントも高齢者が多く、また二度目の移植のケースもあることなどを考慮すれば、生体腎には及ばないものの死体腎をうわまわる成績である。いっぽう倫理的には、これまでの生体腎のように健康な人を傷つけることはなく、不要になった腎臓のリサイクルであるから、腎臓移植にたいする国民の感情はおおいに好転することが期待できる。

いま提供腎が絶対的に不足するなか、透析に苦しむたくさん患者を救うには修復腎移植しかないのである。つかえる病腎の数はいくらかあるのか。百や二百では革新的な医療にはならない。友人の病理学者がさっそく全国的な調査をしてくれた。全国では毎年腎細胞がんの手術が六千六百件ある。このうち移植につかえる直径四センチ以下のがんの腎臓は半分の三千三百例。厚労省の統計では、この八割の約二千四百個が摘出され、廃棄されている。経験上、この二千四百個の廃棄腎の半数の約千二百個は、移植可能である。さらにがん以外の疾患でも三千件をこえる腎臓の摘出があるので、すくなく見積もっても、移植可能な病腎は年間二千個は確保できる。

高見澤の講演の最中、藤原が会場へかけつけた。

でむかえた役員の水野たちに、藤原はあいさつもそっこのけで、

「いいたいことが、いっぱいありますねん」

と関西弁で言いはなつた。なんともきさくな物言いである。さらに、

「日本の学会はまだ江戸時代でっせ。代官と悪徳商人がつるんで庶民をいじめとる。今日は思い切りいわせてもらいまっせ」

とまくしたて鼻息が荒い。フロリダ大学医学部に勤務する優秀な外科医ということなので、さぞバタ〜くさい人物だろうと思っていた水野は、ひどく型破りな人柄に驚き、どんな講演になるのか、かえって心配したほどだった。

講師の藤原のプロフィールを有吉が紹介した。そしてアメリカのフロリダ大学から飛行機を乗り継ぎ、この会のためにかけつけて下さった世界的な移植医だ、と告げると会場から大きな拍手がおこった。

藤原はワイヤレスマイクを手にし、「えらいべっぴんはんの司会者に、世界的な移植医なんていわれると、照れてしもうて、何しゃべったらええか、忘れてしまえますがな」と会場を笑わせた。それから記者団にむかつて、「F1のレース、取材した人おまへんか」とたずねた。記者たちは一瞬きよんとし、それからたがいに顔を見合わせた。だれもないことがわかると、「ぼくはサーキットで、レーサーがハンドルをにぎる車に同乗させてもらったことがある。そりゃ、怖かった。もう別世界ですわな。移植医療では、丸山先生はF1のレーサーや。ところが病腎移植の医学的な妥当性を検証する学会派遣の先生方は、もう何年も臨床から離れているし、さらに臨床経験のない方もおられる。日本では偉い先生方かもしれへん。けど移植に関してはみんなペーパードライバーク。専門委員会がやるうとしとることは、ペーパードライバークがF1レーサーの運転技量を審査するようなものや。正しい検証などできっこありまへん！」と断言した。

このあと藤原は、くだけた調子を一転させ、英単語の医学用語をわかりやすく解説しながら、スライドをつかって慢性腎不全治療の日本の現状について話し、透析よりも腎移植のほうがQOL（生活の質）、生存率、患者にかかる国家的な費用、治療にたいする患者の満足度ですぐれていることを明らかにした上で、移植患者数を欧米と比較した。日本はアメリカの七分の一、ヨーロッパ諸国の四分の一から五分の一にすぎず、死体腎移植だけで比べてみるとアメリカの五十分の一である。このように日本の腎不全患者は移植へのアクセスの面で非常に不利な状況におかれている。

いっぽうアメリカでは国をあげて臓器不足を解消するためさまざまな取り組みがすすめられている。アメリカの学会では、生体移植の拡充に目をむけはじめており、そのひとつとして生体ドナーの費用負担が検討されている。腎臓を提供する意思があっても、休職などの不利が生じるので、ドナーの生活設計などにもかかわる費用を公共の機関が補償しようという考えである。臓器そのものを買

うのは法律に違反するが、ドナー費用の負担なら問題はない。ゆくゆくは公的機関が臓器を買い上げ、レシピエントへ公平に分配する制度をつくることも視野にはいつている。こうしたなかで丸山医師が提起した病腎移植は、欧米各国での臨床例は多く、事実上、通常の治療となっている国もあるのである。

翌朝の各紙には、ふたりの講師の講演内容の要約がのった。

移植学会では、高見澤が市立では十九例の病腎移植があり、さらに増えることが予想される、とする発言を重大視した。わざわざ世間の注目をひくために専門委員会が発表した数は十四例であった。学会幹部は市立病院の院長へ直接電話をいれ、病院をあげ徹底して調べるように要請した。市立では事務職員が連日夜で調査し、新たに十一例、全部で二十五例の病腎移植がおこなわれていたことがわかった。病院が記者会見をして発表したのは二月一日のことである。高見澤は講演から数日後、市立時代から丸山医師に移植チームのひとりだった女性看護師から、病腎の手術記録ノートを個人的に入手し、二十五例すべての詳細についてはいあくを終えていた。